

大学運動部に所属する正・補欠選手の参加動機に関する研究

杉山卓也

Research on motives for participation of regulars and substitute players belonging to an university athletic club

Takuya SUGIYAMA*

Abstract

This research was compared with the precedence research of Yamamoto(1990) that checked the participation motive of regular players and substitute players who belonged to an university athletic club. To grasp the fact of the participation motive of the whole of university athletic club of our country by enlarging objects, this research was investigated by a questionnaire about a participation motive of 185 players who belong to the S university athletic club.

As a result of factor analysis, 6 factors were extracted. 5 factors of the "avoidance" "success and the status" "health and physical strength" "social usefulness" "free" were results to agree with the result of Yamamoto. However, as for the different factor was found, necessity of further investigations was suggested. In the discriminant analysis, only the "free" factor which was also picked out in the precedence research of Yamamoto is picked out as a distinction factor. It was used for distinction of regular players and substitute players by both researches, so it became clear that the "free" factor is the most important factor. Comparing in sex, the specialty of learning, sport categories, grades, play number of years, and presence of national tournament appearance experience, the "freedom" factor was related in sex, sport categories, play number of years and presence of national tournament appearance experience that appeared of the significant difference. And generally it was strongly influenced towards regular players than substitute players.

キーワード：参加動機、大学運動部、体育会、レギュラー、非レギュラー

I 序論

体育・スポーツは「心・技・体」のバランスが大切だと言われているが、体育・スポーツに関連する日本で最大の学会である日本体育学会において、2016年度には専門分科会別にみると体育心理学分野の発表が最も多く（日本体育学会第67回大会プログラム、2016）、755の研究発表中111を数えるなど、近年では特に心理面について多くの注目が集まっている。また現代の社会問題として、運動部活動において教師の児童・生徒への体罰問題が取り上げられている。それは、児童・生徒がどのように考え、どのように思っているのかを理解せず、教師が一方的な感情で指導をおこなうことが原因の一つと考えられる。よって、教師が児童・生徒の心理面について理解・把握しておくことが指導や運営上において必要なことであると考えられる。そして、この児童・生徒の心理面の中でも、根幹の部分である「なぜ運動部に参加しているのか」ということについて理解・把握することが重要である。

これはいわゆる「参加動機」というものである。動機とは、一般には人間の行動をある一定の方向へ駆り立ててい

く推進力となるものと定義されており、生体内にあつて生体を行動に駆り立てていく原動力である動因をも包摂したより広い概念であると考えられている（見田・栗原・田中、1988）。つまり、人間の行動の「なぜ」を説明するために人為的に構成された概念が動機である（米川、1987）。以上の一般的な定義に従い、本研究で大学運動部への参加動機といった場合には、大学生が運動部に参加する理由といった意味とする。

参加動機に関する先行研究としては、先ず初めに古くから有名であるPasser（1982）の子供と青少年のスポーツ参加の動機に関する研究が挙げられる。彼は、子供と青少年のスポーツ参加の動機を「親和」、「技術の向上」、「刺激」、「成功と地位」、「体力」、「エネルギーの解放」の6つの主要カテゴリーに分類した。また、我が国でも丹羽と村松（1979）が女子大生のスポーツ参加の動機を、因子分析を用いて明らかにし、「活動性因子」、「人格形成因子」、「勧誘因子」、「親和因子」、「探索因子」、「社会的承認因子」、「技能的因子」、「美容・健康因子」の9つの因子を導きだした。さらに、山本（1990）は、Passerの提示したスポーツ参加の動機カテゴリーを目安として50名のインタビュー調査を用いて52項目の質問紙を作成し、T大学の7種目（個人型：テニス・陸上・スケート、集団型：野球・サッカー・

* 教育学部

ラグビー・バスケットボール)の運動部を対象に大学生の運動部参加にどのような動機が関与しているのかを因子構造の次元から明らかにし、その重要性の違いを正選手と補欠選手を比較することにより明らかにしようと試みた。その結果、運動部参加の動機として、Passerのスポーツ参加の動機「技術の向上」、「体力」、「親和」、「成功と地位」と符合する動機として、「達成」、「健康・体力」、「親和」、「自由・平等性」、「社会的有用性」が確認され、さらにそれ以外に「回避」、「固執」といった独自の2因子が含まれ、最終的に計7因子が確認された。その後、山本の研究を参考に蔵本・菊池(2006)は大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究を行い、体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較を行った。結果として、参加動機因子は山本のものとはほぼ同様であり、運動部とサークルの比較では、参加動機の各因子得点において7因子中5因子で有意差がみられた。これにより、体育会運動部に所属する学生とスポーツサークルに参加する学生では参加動機に違いがあることが分かり、運動部員だけを対象とした山本の研究とは異なる結果となった。

以上のように、わが国でもいくつか先行研究が行われてきている。しかし、山本の研究ではその結果が厳密に我が国全体の運動部の特質を反映したものであるかは今後検討を要することが問題点としてあげられた。その問題点をより詳しく明らかにしていくと、研究対象が1大学に限定されていたことが挙げられる。その中で、山本は“体育専攻の正選手において「自由・平等性」動機の影響が特に強かった(504)”という先の結果は、調査対象者の中に体育の推薦入学者が含まれているという事実によって説明されるであろう”と述べており、正確な人数は明記されていないのでわからないが、一定数の体育系のスポーツ推薦者が存在することを示唆している。全国の大学全てに体育の推薦入学があるわけではなく、その結果は体育の推薦入学がない大学では異なることが考えられる。また、蔵本・菊池の研究では体育学部生の占める割合が9割を超えている大学でのみ研究を行っており、体育が専門ではない大学で調査を行っていないことが問題点として挙げられる。さらに、山本が調査対象とした種目が、個人型種目(テニス、陸上、スケート)と集団型種目(野球、サッカー、ラグビー、バスケットボール)の計7種目にとどまっていることも問題点として挙げられよう。

よって本研究では、この問題を追及するために、対象を体育系のスポーツ推薦者が少ない総合大学であるS大学にし、調査対象種目を10種目に増やし、山本の研究方法に沿ったかたちで研究をおこなった。そして山本との研究と本研究の結果を比較検討することにより、我が国の運動部の特質を検討することを目的とした。また、本研究を行うことで、学校等で教員が運動部の指導を行う際に、運動部員の参加の理解を助け、運動部員参加継続に向けての手立てを打つことなどに重要な資料となろう。

II 方法

1. 調査対象者

この研究でアンケートを配布した人数は300名であった。そのうち、本研究で調査用紙を回収できたのは、S大学の運動部に所属している1年生から4年生までの男女競技者185名(男子144名、女子41名)で、回収率は61.7%であった。調査の対象とした種目は個人型5種目(テニス、陸上、水泳、剣道、体操の計76名)と集団型5種目(野球、サッカー、ラグビー、バスケットボール、バレーボールの計109名)に分類できる計10種目であった。ある一定の部活動に限定するのではなく、先行研究の7種目より種目数を増やし多様性の面を考慮すること、また、ある程度の部員数があることを考慮し、本研究では部活動10種目を対象に調査を行った。

2. 調査用紙

本研究で用いた質問紙の質問項目は、先行研究で山本が50名のインタビューをもとに作成した調査書を用い、52の質問項目の質問紙を5段階評価で行われた。これら全て、山本の先行研究にならって行った。また、正選手と補欠選手の運動部参加の動機の違いについて、先行研究で行っている性別、学問の専攻別、種目のタイプ別、学年別に加え、本研究では競技年数別、全国経験の有無についても調査を行った。

3. 手続きと分析方法

調査用紙は、調査者が直接その場にいる部員全員に配布し、一週間後に回収された。調査期間は2016年9月中旬から下旬であった。

データの分析は以下の方法で行われた。まず、分析をするにあたって、5段階評価の回答をすべて1にした者、すべて3にした者各1名が発見されたため、それらのデータの信頼性は低いと判断し、185名分のデータからその2名分のデータを除外し、それ以外の183名のデータで、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。次に、各ケースの因子得点を算出した後、正選手と補欠選手を区別する動機の因子とは何かを明らかにするために、抽出された動機の因子で両群の判別を試みた。用いた判別分析はステップワイス法であった。さらに、正選手と補欠選手の運動部参加の動機の違いを、性別、学問の専攻別、種目別、学年別、競技年数別、全国経験の有無ごとに因子得点を比較検討した。競技年数については、0~3年、4~6年、7~9年、10年以上の四つのカテゴリーに分類した。これらの差異の検証には、一元配置の分散分析を用いた。

正選手と補欠選手の分類は、先行研究にならって調査対象者全員に、大学に入学以来調査の時期までにインカレ等の主要な大会への選手としての出場頻度を尋ねるために、①大学入学以降、本調査の実施までの前述の大会への実出場数に関する質問と、②来年度同様の大会への選手として

の出場予測数に関する質問に自己評定してもらい、この2つの質問から分類を行った。この2つの質問に対して、1. ほとんど毎回選手として出場した(しそう)、2. たまに選手として出場した(しそう)、3. ほとんど毎回選手として出場しなかった(しなさそう)という3件法で質問を行い、回答させた。その結果、2つの質問ともに1と回答した者を正選手として扱い、一方、①②の質問に2,3、3,2、3,3と回答した者を補欠選手として扱った。以上の手続きを経て、42名が正選手として、67名が補欠選手として分類された。なお、来年度についての質問項目も含まれるため、4年生と上記に該当しない者74名については、どちらにも分類できない不安定な状態にあるものとして、因子分析以降の判別分析並びに比較分析からは除外し、判別分析並びに比較分析は正選手42名と補欠選手67名の計109名を対象とした。

Ⅲ 結果および考察

1. 参加動機の因子構造

大学生がどのような動機で運動部に参加しているのかを明らかにするために、調査対象者185名からすべての回答が同一の回答で不適切な回答と考えられた2名のデータを除く183名分のデータを、山本の先行研究と同様に、52の質問項目に関して主因子法・バリマックス回転で因子分析を行った。その結果、固有値1以上の因子は7因子で説明率は57.34%であったが、第7因子の因子負荷量が0.4以上のものは1項目もなく、因子として成立しないため、因子数を6とし、再度分析を行った。その結果、先行研究と同様の基準となる因子負荷量が0.5以上の項目で6因子29項目が抽出され、説明率は54.38%であった。

表2には因子分析のバリマックス回転後の因子負荷行列を示した。第1因子には、“やめると意志の弱い人間だと他人に思われそうでいやだから”“やめると仲間に向け目を感じると思うから”“やめるとチームメイト、あるいは指導者との関係が気まずくなるから”などの10項目が含まれた。やめることによる様々な問題を回避する内容の項目が含まれたため、「回避」と命名された。第2因子には、“所属していることを誇りにできるチームだから”“少しでもうまくなり、あるいは良い記録を出し、競技を楽しめるようになりたいから”“勝利を体験したいから”などの7項目が含まれた。多様な項目が含まれたが、達成目標の自我志向と熟達志向に加え、チームへの愛情が感じ取れたため、「達成目標と帰属」と命名された。第3因子には、“健康を維持したいから”“日常生活でたままったストレスを発散させたいから”“運動した後の爽快感を味わいたいから”などの4項目が含まれた。心理的・身体的健康を表す項目が含まれ、「健康・体力」と命名された。第4因子には、“成功して有名になりたいから”“成功して他人を見返してやりたいから”“レギュラーの座を取りたいから、あるいはずっとレギュラーで

いたいから”の3項目が含まれた。成功を掴むことによる地位の確立が項目に含まれることから、「成功・地位」と命名された。第5因子には、“続けていると就職に有利だから”“やめると就職に不利になるから”“四年間続けることは、社会的な信頼を得ることにつながると思うから”の3項目が含まれた。就職に関連することなど、事後の有益性を考慮した項目が多く、「社会的有用性」と命名された。第6因子には、“チームの雰囲気が自由だから”“おしつけられず、自主的に練習できるから”の2項目が含まれた。項目に気軽に自由な雰囲気が含まれていることから、「自由」と命名された。

以上の結果は、これまでのスポーツ参加の動機に関する研究結果と運動部参加に関する研究結果に一部符合した。まず Passer のスポーツ参加の動機に関する研究結果と因子に含まれる質問項目を見て判断し比較すると、本研究で明らかになった「達成目標と帰属」、「健康・体力」、「成功・地位」の各因子は、Passer が提示した6つのスポーツ参加の動機カテゴリーのうち「技術の向上」、「体力」、「成功と地位」に対応しているように思われる。これは、スポーツに参加する動機と運動部に参加する動機とは、重なりあう部分があるということを示しており、先行研究で山本が述べたように、運動部がスポーツ活動を行う目的で組織された集団であるならば当然の結果である。Passer の「親和」、「刺激」、「エネルギーの解放」については本研究において確認することはできなかった。これは、Passer の先行研究と山本の先行研究でも異なる結果が出ており、本研究では山本の調査方法を踏襲していることから、当然の結果とも言える。

次に山本の運動部参加に関する研究結果と因子に含まれる質問項目を見て判断し比較すると、本研究で明らかになった「回避」「成功と地位」「健康・体力」「社会的有用性」「自由」は、山本が提示した運動部参加動機カテゴリーの「回避」「達成」「健康・体力」「社会的有用性」「自由」と同様の項目が複数含まれており、それぞれに対応していると考えられる。これは、本研究が山本の研究方法に沿ったかたちで行われたため、ある意味当然の結果と言える。しかし、内容的に若干の差異が生じている部分もある。本研究の「成功と地位」因子は、山本の動機カテゴリーの「達成」に含まれるように思われるが、内容的には成功後の地位に関する事柄が中心となっている。つまり、技術の向上や目標の達成に関することだけでなく、成功して見返す、地位を維持・獲得するという、個人の誇りや他者から認めてもらいたいという気持ちも運動部参加の一つの理由になっていることを示している。一方、山本の「親和」「固執」については本研究において確認することはできなかった。この結果は、スポーツ系の推薦入学者が少ない大学では、交友関係の維持・拡大に関わることや自己の設定した目標に固執するようなことは運動部を続ける動機に関係がないという新たな特徴を表している可能性がある。また「固執

に関しては、スポーツ系の推薦入学者は各々の専門であるスポーツをやめづらいと考えられるので「固執」という因子に表れるが、今回はスポーツ系の推薦入学者が少ない大学を対象としているので、自己設定した目標にあくまで固執するようなことはないであろう。

2. 正選手と補欠選手の参加動機の比較

分析対象となった109名のデータに関して、先行研究と同様に、ステップワイズ法による判別分析を行った。その結果、判別変数に少なくとも1つの欠損値が見つかった5名分のデータを除いた104名分(正選手43名、補欠選手63名)のデータで分析を行った。BoxのM検定により、分散共分散行列の相当性が確認された($F=9.625$, $p=.414$)。Wilksのラムダ検定を行った結果、貢献度が低い5因子が除去され、「自由」因子により、正選手と補欠選手が判別できることが明らかとなった($p<.01$)。判別確率は68.3%であった。表3にステップワイズ判別分析による判別係数及び分類係数表、表4にステップワイズ判別分析による正選手と補欠選手の判別表を示した。

先行研究では「自由・平等性」「健康・体力」「固執」の各因子で正選手と補欠選手を判別できた。また、この3つの因子の中でも特に「自由・平等性」因子が正選手と補欠選手の判別に実質的な影響を与えており、本研究の結果もこれを支持するものであると考える。分類係数の情報は、「自由」因子が補欠選手よりも正選手に強い影響を及ぼしていることを明らかにしている。先行研究では、「健康・体力」因子、「固執」因子は正選手よりも補欠選手に強く働いているが、本研究では見られなかった。

異なる対象に行った先行研究と本研究において、両研究において「自由」因子により正選手と補欠選手の判別が可能であるとの結果が出たことから、「自由」因子が運動部の参加動機に最も影響を与えているということが言えるであろう。今後、運動部への参加を促すためには、この点を考慮することが必要となろう。

3. 性別、学問の専攻別、種目別、学年別、競技年数別、全国大会出場の有無別にみた正選手と補欠選手の参加動機の比較

ここでは、主体側の条件によって、学生が運動部に参加する動機に違いが見られるとの仮説に立ち、性別、学問の専攻別、種目別、学年別、競技年数別、全国大会出場の有無別に正選手と補欠選手の参加動機の比較を行った。山本の先行研究においては、性別、学問の専攻別、種目別、学年別での比較は行われたが、本研究においては、競技年数別、全国大会出場の有無別においても差が見られるのではないかと仮説に立ち、質問内容を追加した。尚、比較にはすべて因子得点の平均値を用い、一元配置の分散分析によって差異の検証を行った。

1) 性別での比較

表5は性別にみた正選手と補欠選手の因子得点を示したものである。正選手と補欠選手で性別に比較した場合、「成

功・地位」因子($F=4.636$, $p<.05$)、「自由」因子($F=3.437$, $p<.05$)でそれぞれ有意差が生じた。「成功・地位」因子では、女子の補欠選手よりも男子の正選手のほうが有意に高い数値を示し($p<.05$)、また、女子の補欠選手よりも男子の補欠選手のほうが有意に高い数値を示している($p<.05$)ことから、女子の補欠選手と比べ男子のほうが競技での成功や地位を強く求めていることが動機で運動部に参加し続けている傾向にあるということが言える。つまり、男子のほうが、他者から認められたり、自分の存在意義を示したい気持ちが強く、女子の補欠選手より外発的に動機づけられていることが考えられる。一方、「自由」因子については、男子の補欠選手よりも男子の正選手のほうが有意に高い数値を示し($p<.05$)、山本の研究結果を支持する結果となった。このことから、男子の補欠選手に比べ男子の正選手のほうが、チームの雰囲気や自由さに動機づけられて運動部に参加し続けている傾向にあるということが言える。

2) 学問の専攻別での比較

表6は学問の専攻別にみた正選手と補欠選手の因子得点を示したものである。正選手と補欠選手を体育・スポーツ関連の専攻・専修に所属している者と、それ以外の者として分類し比較したところ回避因子($F=2.883$, $p<.05$)と自由因子($F=3.099$, $p<.05$)で有意差がみられた。その後の下位検定ではどちらの因子にも有意差は見られなかったが、有意傾向がみられた。回避因子の質問項目には自分が部をやめることによる周りや自分への影響を考えるとやめられないといったものが含まれる。「体育・スポーツ専攻の正選手」と「体育・スポーツ専攻以外の正選手」を比較すると有意確率が0.067であり、有意傾向がみられる数値である。回避に動機づけられている率が高いのは「体育・スポーツ専攻以外の正選手」であり、このことから保健体育・生スポの正選手はやめられないから行っているという動機づけは少ないことが分かる。一方自由因子では、「体育・スポーツ専攻の正選手」と「体育・スポーツ専攻以外の補欠選手」を比較した有意確率が0.084、「体育・スポーツ専攻以外の正選手」と「体育・スポーツ専攻以外の補欠選手」を比較した有意確率が0.082であり、こちらも有意傾向がみられた。この結果は「体育・スポーツ専攻の正選手」、「体育・スポーツ専攻以外の正選手」が「体育・スポーツ専攻以外の補欠選手」よりも自由因子に動機づけられていることをあらわしており、これは、山本の先行研究の「正選手は補欠選手よりも、チームの雰囲気や自由さを運動部活動の動機としている」という結論を一部支持するものとなった。

3) 種目別での比較

表7は種目別にみた正選手と補欠選手の因子得点を示したものである。正選手と補欠選手を種目別に比較した場合、表7で示すように個人型種目と団体型種目の2つのカテゴリーに分けて比較を行った。その結果、「達成目標と帰属」因子($F=2.549$, $p<.05$)、「健康と体力」因子($F=5.080$, $p<.05$)、

「成功・地位」因子 ($F=7.095, p<.05$)、「自由」因子 ($F=3.592, p<.05$) の4つにそれぞれ有意差が生じた。「達成目標と帰属」因子では、団体競技の補欠選手のほうが個人種目の補欠選手よりも有意に高い数値を示している ($p<.05$)。このことから、団体種目の補欠選手は個人種目の補欠選手に比べてチーム愛や勝利思考を持っている傾向にあると考えられる。「健康と体力」因子では、個人競技の補欠選手のほうが団体競技の補欠選手よりも有意に高い数値を示している ($p<.05$)。このことから、個人種目の補欠選手は健康や体力を維持したり、より高めることが動機となり運動部活動に参加する傾向にあることが考えられる。「成功と地位」因子では、団体競技の選手のほうが個人競技の補欠選手よりも有意に高い数値を示した ($p<.05$)。このことから、個人競技に比べて、団体競技のほうが個人ではなく、チームとしての成功を目標に運動部活動に参加していると考えられるのではないかと推測される。「自由」因子では、個人競技の正選手と個人競技の補欠選手で、正選手のほうが補欠選手よりも有意に高い数値を示している ($p<.05$)。また、個人競技の補欠選手と団体競技の正選手で、団体競技の正選手のほうが個人競技の補欠選手よりも有意に高い数値を示している ($p<.05$)。この2つのことから、どちらも正選手は、雰囲気的自由さや練習の自主性に重きを置くチームであることを運動部活動参加の動機としている傾向があることがわかる。山本の研究では、1因子にしか有意差が生じなかったのに対し、今回の研究では4因子に有意差が生じた。その理由として、今回の研究は、先行研究に比べ、アンケート対象運動部を増やしたことが関係しているのではないかと推測できる。断定することはできないが、競技種目が増えることによって、運動部活動参加動機が多様化した可能性が考えられる。

4) 学年別での比較

表8は学年別にみた正選手と補欠選手の因子得点を示したものである。学年別に正選手と補欠選手を比較した結果、本研究においてはどの因子においても学年別に正選手と補欠選手間で有意差を確認することはできなかった。しかし山本の先行研究と比較すると、山本の研究では正選手と補欠選手を学年別に比較したときに、「達成」、「親和」、「自由・平等性」の各因子でそれぞれ1%水準の有意差が見られていた。これは、S大学のようなスポーツ系の推薦入学者が少ない大学では、運動部に参加する動機を、技術や記録の向上に関してや交友関係の維持・拡大、チームの自由な雰囲気には求めないという新たな特徴を表している可能性がある。ただ、その中で有意差は見られなかったものの、「自由」因子においては山本の研究結果と同じように、いずれの学年においても正選手において因子得点が高かった。

5) 競技年数別での比較

表9は競技経験年数別にみた正選手と補欠選手の因子得点を示したものである。競技年数については0~3年、4~6年、7~9年、10年以上の四つのカテゴリーに分けて比較を

行った。表9に示すように、正選手と補欠選手を競技年数のカテゴリー別に比較した場合、「自由」因子でのみ5%水準の有意差が生じた ($F=2.50, p<.05$)。「自由」因子に関しては、競技年数の短い0~3年の正選手において因子得点が高く、競技年数の比較的長い7~9年の補欠選手において低い結果となった ($p<.05$)。

山本らによる別の先行研究(1992)では、スポーツ継続の意図と参加動機の関連について調査している。それによると、スポーツ継続の意図をもつ群が、現在の運動部参加の重要な理由として、スポーツ的達成やその他スポーツにまつわる二次的な価値を重視しているのに反し、スポーツ継続の意図をもたない群は、やめたくてもやめられないということを運動部参加の主要な理由としているということが確認できる。これは、競技年数の短い正選手と競技年数の長い補欠選手の運動部参加の動機の理由の一つではないかと考える。

6) 全国大会出場経験の有無での比較

表10は全国大会出場経験の有無別にみた正選手と補欠選手の因子得点を示したものである。正選手と補欠選手を全国大会出場経験の有無別に比較したところ、「自由」因子で有意差がみられた ($F=3.78, p<.05$)。「自由」因子では「全国大会出場経験無し」の補欠選手よりも「全国大会出場経験無し」の正選手のほうが有意に高い数値を示した ($p<.05$)。このことから、全国大会に出場経験のない正選手はチームの雰囲気的自由さや、押し付けられず自主的に練習ができることに動機付けられているが、全国大会に出場経験がない補欠選手は必ずしもそうではないということが分かった。その要因としてはやはり正選手に比べ補欠選手は球拾いや応援など、正選手の補助の役割に回ってしまい、十分に自分の練習時間が確保できていないことがあげられる。

4. 総合考察

本研究で因子分析の結果抽出された6因子中の5因子である「回避」「成功と地位」「健康・体力」「社会的有用性」「自由」は、多少の名称の違いはあれど、山本の先行研究でも抽出された因子であり、我が国における大学運動部への参加動機に共通して存在する因子であると考えてよいであろう。ここで取り上げるのは、外発的動機の多さである。「自由」因子に含まれる“チームの雰囲気が自由だから”“おしつけられず、自主的に練習できるから”は能動的・自発的な要素が多く、内発的動機に関わる因子と考えても良いが、「回避」「成功と地位」「健康・体力」「社会的有用性」の4因子は外発的動機であると考えられ、そのスポーツをすること自体が楽しいといった内発的動機は重要であると考えられているにもかかわらず、5因子中1因子でしかみられなかった。滋倉(2006)の運動部活動でのストレスに関する質的研究で抽出された概念にも、競争の中で(プレッシャーを感じる)が含まれ、他にもコーチ・チームメイトとの人間関係、活動条件にも類似した概念が含まれており、運動部への参加動機に内発的動機が少ないという本

研究結果は、澁倉の先行研究を支持する結果となった。運動部に所属し運動をしていること自体が、自分へのプレッシャーや周囲からのプレッシャーに繋がっている可能性が考えられ、大学運動部の在り方の根本を見直す必要性を示唆しているのかもしれない。

その中で、本研究の判別分析において唯一抽出された「自由」因子は、その因子得点が高いと、正選手である可能性が高くなる。比較を行った性別、学問の専攻別、種目別、学年別、競技年数別、全国大会出場の有無別という6側面中、性別、種目別、競技年数別、全国大会出場の有無別の4側面において、有意差のある因子となった。山本の判別分析の結果においても抽出された因子であり、正選手と補欠選手を分ける大きな判別力を示した。前述の内発的動機にも関わる因子であることを考えると、レギュラーになるような選手は、内発的に動機づけられていることが多いと言えよう。指導する立場にある人たちは、その点を考慮に入れ、環境を整え、レギュラーになれるような選手の参加動機を高めることにも用いることができるであろう。また、その「自由」因子に含まれたのは“チームの雰囲気は自由だから”“おしつけられず、自主的に練習できるから”のわずか2項目であり、今後簡易に検査として用いることも可能である。

5. 課題と今後の展望

本研究の課題としては、まずアンケートを配布した人数が300名にも関わらず、調査の対象にできたのが185名であり、回収率が61.7%とやや低いことが挙げられる。さらに、競技年数0-3年の正選手と全国経験有りの補欠選手が各4名と、分析対象者が少ない。より精度の高い研究結果を得るためには、さらに調査対象の人数を増やし、多様な対象に調査していくことが必要となろう。また、本研究は山本の先行研究に沿って行われたが、両研究で異なる因子が抽出される結果となった。同様の方法で調査・分析を行った以上、この結果は対象者の質の違いが生んだものと考えるのが自然である。スポーツ系の推薦入学者の人数、対象運動部数などによって結果が異なってくるということは、我が国全体の大学運動部の特質が未だ明らかにされていないということである。今回出た課題を踏まえつつ、今後研究を進めていく際には、競技レベルや練習頻度についても考慮しつつ、さらに研究を進めていくことが必要である。それが、我が国の運動部の全体像を把握することに繋がり、運動部の指導方法等に関してより精度の高い示唆を与えていくことに繋がると考える。

IV まとめ

本研究と同じく大学運動部に所属する正選手・補欠選手の参加動機を調べた山本の先行研究と比較し、対象者を拡大することにより我が国の大学運動部員の参加動機の実情を把握することを目的とし、S大学運動部に所属する185

名の選手の参加動機について、質問紙による調査を行った。

因子分析の結果、6因子が抽出された。「回避」「成功と地位」「健康・体力」「社会的有用性」「自由」の5因子は山本の結果と符合する結果であったが、異なる因子も見受けられ、更なる調査の必要性が示唆された。判別分析においては、山本の先行研究においても抽出された「自由」因子のみが判別因子として抽出され、両研究で正選手と補欠選手の判別に用いられる重要な因子であることが明らかとなった。性別、学問の専攻別、種目別、学年別、競技年数別、全国大会出場の有無別にみた正選手と補欠選手の参加動機の比較においては、有意差の出た性別、種目別、競技年数別、全国大会出場の有無別のすべてにおいて、判別分析の結果が示すように「自由」因子が関連しており、概して補欠選手よりも正選手に強く影響していた。

謝辞

本調査にご協力いただきましたS大学運動部に所属する皆様、並びにデータの収集・分析に尽力してくれたゼミ生の大野裕矢、高橋康太、福井瑠生、水野秀明各氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 蔵本健太・菊池秀夫「大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究—体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較—」中京大学体育学論叢 47-1. 37-48. 2006
- 見田宗介・栗原彬・田中義久 編 社会学事典 弘文堂 東京 1988. p. 640
- 日本体育学会第67回大会プログラム. 大阪体育大学 熊取キャンパス. 2016年8月24~26日.
- 丹羽昭昭・村松洋子「女子大生のスポーツ参加動機に関する因子分析的研究」体育学研究 24: 25-38. 1979.
- Passer, M. W., 「Children in sport: participation motives and psychological stress.」Quest, 33:231-44. 1982.
- 澁倉崇行「運動部活動におけるストレスマネジメントの有効性に関する研究」ミズノスポーツ振興財団 スポーツに関する科学的・学術的・医学的研究に対する助成 報告書, 2006
- 山本教人「大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較」体育学研究 35:109-119. 1990.
- 山本教人・金崎良三・南貞己「大学体育大会参加者の運動部参加の動機」J. Health. Sci. 14: 25-33. 1992
- 米川直樹「運動と動機づけ」松田岩男・杉原隆 編著. 運動心理学入門. 大修館書店. 1987. p. 55